

第五回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

郡司 正勝 著『郡司正勝刪定集』

(第一巻 かぶき門 1990年11月30日 第二巻 傾奇の形 1991年2月5日
第三巻 幻容の道 1991年4月20日 第四巻 変身の唱 1991年6月28日
第五巻 戯世の文 1991年9月10日 第六巻 風流の象 1992年3月20日
白水社 刊)

郡司 正勝 ぐんじ まさかつ 大正2年(1913)生まれ。
平成10年(1998)没。北海道出身。

専攻は、日本演劇・歌舞伎・舞踊。早稲田大学文学部卒業。早稲田大学名誉教授(受賞時)。
著作は、『かぶき一様式と伝承』、『郷土芸能』、『おどりの美学』、『かぶきの発想』、『かぶきの美学』、『歌舞伎十八番集』、『文楽』、『舞踊』、『地芝居と民俗』、『荷風別れ』、『かぶき論叢』、『童子考』、『風流の図像誌』、他がある。

受賞のことば

和辻哲郎文化賞という思いもかけぬ賞を賜り、驚きかつ望外の喜びに存じます。氏には一度も面接の機を得ませんでした。『鎖国』と『歌舞伎と操り浄瑠璃』で深く学ぶところがあり、学恩のほど厚く感じておりました。誠に有り難く厚く御礼申し上げます。

《選考委員評》

香りと魅力

司馬 遼太郎

賞は、人と作品に与えるものではなく、人と作品から与えられる、つまりよき受賞作によって賞のほうに肥らせてもらえるのである。

毎日、そういうつもりで、本を読んできた。

今回は、郡司正勝氏の半生の選集にめぐりあい、選考委員三人の全き一致によって賞をもらっていただくことになった。

全集ではなく、『刪定集』である。古代中国では、木簡や竹簡に文章を書いた。自分の文章が気に入らなければ、小刀でもって削る。刪定集とは、自ら削って自ら気に入ったものをのこした集という意味のようで、選集という語感に比べ、小刀の操作という行為のにおいがまじっている。

郡司正勝氏は演劇学の大家でありながら、書齋のみにとじこもらず、演劇作品も書き、演出もし、さらには土俗のなかの演劇を訪ねあるくというフィールド・ワークもなさっている。戸板康二氏が、『刪定集』の月報のなかで、

「郡司さんの学問に、或る香りが添えられているのに気がつく」(「独創の演劇学」)

というのは、みずから舞踊を書き、みずから稽古に立ちあい、また山野を歩いて民俗芸能を探查するというのが「或る香り」になっているということかと思える。刪定という、行為をふくむ言葉をえられたのは、いかにもこの人の言語感覚らしくておもしろい。むしろ『刪定集』ということばは、本邦初演に相違ない。

また戸板さんは、郡司さんの「地底の骨」と「荷風離れ」には、「ふしぎな色気さえある」といわれている。『刪定集』のおもしろさは、それらの名品さえも刪られたことである。

いっさいが、かぶきなど日本の伝統芸能に関する論考のみにかぎってしまわれている。その点、この集の主題はみごとにたがえられている。

すでに日本文化の研究は、国際環境にある。この『刪定集』六冊は、外国の研究者にとっても、後世にとっても、また現世の民族学分野や記号論分野にとっても、魅力にみちている。

愛情をこめた探究

陳 舜臣

『郡司正勝刪定集』が和辻哲郎文化賞にきまったことを心からよろこびたい。

芸能は学問の対象になりうるが、本来、それをこえなければならないものだとおもう。

芸能はジャンルとして、きわめて多岐にわたっているし、それぞれ深いのである。その研究は、人間の深奥にひそむなにか靈的な力に迫ることで、あらゆる方向から、さまざまな工夫をこらしてさぐり、したがって長い歳月を経て、ようやく近づくことができる。郡司氏が門弟諸氏に、学問の体系化を急いではならないといましめたのは、そのことを意識されたのであろう。

至難の道だが、近づくにつれて、名状しがたい喜び、興奮を伴うのではあるまいか。郡司氏は、「わたしの頭と胸のあいだ辺りに、一つの聖なる静かな山が住むようになった」と述べておられるが、芸能の秘奥は、すでに対象ではなく、氏のからだのなか、心のなかに棲みついているようだ。探究者としては至福の境地であろう。さらに、「としを取るということは、いままで、見えなかったものが、見えて来たり、聞こえなかったものが聞こえてくるものだよ」という氏の言葉は、氏の探究がさらに実り多く展開することを予想させる。その収穫に接することも、私たちの大きなたのしみである。

経済大国となってしまった日本に、風流心の衰えがみえることを、郡司氏は心配しておられる。これは氏だけの心配ではない。私たちは氏の著作ぜんたいを、一種の警鐘として読む時期に来ているのではないかという気がする。この刪定集のなかに、人びとは日本の進路、さらに人間生活の指針まで示されていることに気づくであろう。それは文章のなかに郡司氏の愛情がこもっているからである。

枯淡の筆致と深い思索性

梅原 猛

郡司正勝氏の『刪定集』を読んでみて、いささか意外な感に打たれた。というのは、約二十年前に、氏の『かぶきの美学』が出た時に読んだ読後感と今度の『刪定集』の読後感はあまりにも違ったからである。『かぶきの美学』は、歌舞伎というおどろおどろしい芸術の美について、その美の陶醉者が語っている熱気にとらわれた本として深く私の印象に残っていた。論じられている対象もまさにバサラ的な世界であるけれど、それを論じているこの本もバサラ的であるという印象が深く残っていたのである。

そう思って、今回の「和辻哲郎文化賞」の候補作になった『刪定集』を読んでみたわけであるが、そこにはむしろそういうバサラ的情念を抑制した大家の淡々たる筆づかいによる歌舞伎のさまざまなジャンルに対する甚だ精緻な論証があったのである。「刪定」というのは、削りを直して整えるという意味だそうだ。郡司氏は、余分なものをできるだけ削り取って、実に整然としたしかもその内面に微妙な味わいをもった文章に、自己の積年の学問の成果をまとめられたのであろう。

考えてみれば、これは学者としての郡司氏の変化によるのみではない。むしろ郡司氏の学問が今や歌舞伎の研究として常識になっていることを意味するのである。郡司氏が二十年前に熱っぽく語った歌舞伎論はほぼ通説になり、それでわれわれは今読み返してあまり刺激を感じなくなったのであろう。その意味でも郡司氏の業績は偉大であり、歌舞伎に対する学問の巨匠といってもよいであろう。このような巨匠に「和辻哲郎文化賞」をお贈りすることができるのは、むしろ選者にとって大変な光栄なのである。